桜門体育学研究　48(2)：91−93，2014

平成25年度桜門体育学会大会報告

大会報告

日本大学経済学部　健康スポーツ分野　助教　近藤　克之

1．大会概要

平成25年度桜門体育学会大会は，平成26年1月29日（日）に日本大学文理学部百周年記念館にて開催された．本学会大会は，学会組織が改編されて4回目の学会大会であった．本大会は主に学会企画シンポジウムと特別講演，一般発表の内容で行われた．学会企画シンポジウムでは，東京2020オリンピック・パラリンピック大会に向けて日本大学としてどのような取り組みを行っていくのかについて，選手の立場のみならず，支援する監督やコーチ，研究者の視点も交えながら，さらには日本大学として日大アスリートが活躍できる体制を整える事務局の取り組みも語られた．特別講演では，スポーツマンシップとレジリエンス（修復力）と題して，NPO法人スポーツマンシップ指導者育成会理事長の広瀬氏にお越しいただきお話をいただいた．一般発表は，百周年記念館エントランスホールにてポスター発表形式で，38題の発表が行われた．大学院生のみならず体育学科生は，普段の研究成果を分かりやすくポスター形式にまとめあげ，積極的に他者と意見交換をしている様子が垣間みられ，非常に有意義な時間となっていた．

本大会の開催は，桜門体育学会事務局はじめ，実行委員会委員各位の多くの協力なくしては成り立たなかった．心から感謝申し上げる次第である．

2．大会内容

①学会企画シンポジウム

シンポジスト

井上　由大

（日本大学保健体育事務局　事務長，
保健体育審議会自転車部監督）

橋本　凌甫

（日本大学経済学部経済学科　4年生，
保健体育審議会自転車部選手）

竹俣　壽郎

（日本大学生物資源科学部　助手，
保健体育審議会重量挙部コーチ）

糸数　陽一

（日本大学文理学部体育学科　4年生，
保健体育審議会重量挙部選手）

池田　祐介

（新潟医療福祉大学健康科学部　講師，
元国立スポーツ科学センター研究員）

②理事会

③特別講演

講師

広瀬　一郎　氏

（NPO法人スポーツマンシップ指導者育成会　理事長）

司会：高橋　正則

（日本大学文理学部体育学科　教授）

④一般発表（ポスター発表）

⑤総会

⑥懇親会

写真1　国際会議場の様子

午前10時より百周年記念館国際会議場にて予定通り学会企画シンポジウムが開始された．会場には多くの先生（文理学部はじめ他学部の体育教員や元体育学科教員など）や体育学科卒業生，在学中の大学院生や学生達が参加した．

初めに，井上由大氏よりこれまでの日本大学におけるアスリートを支援する体制づくりについて，スライドを用いながら詳細にお話をいただいた．日本大学の様々な取り組みが施設面，入試制度，保健体育審議会所属の学生の学習支援についてなどに分けて語られ，今後も「日大アスリート」を支援していく体制を充実させていきたいという思いが伝わってきた．井上氏はまた，日本大学自転車部の監督としても，日々選手に接してこられている．昨年，全日本大学対校選手権大会の総合優勝が30連覇で途切れたお話をされ，自転車部に脈々と受け継がれる「なにくそ精神」で，王座奪回に向けて指導されているというお話は，チームとしてどのように戦っていくのかということを考えさせられた．また，多くの自転車部の卒業生が全国各地で，教諭や指導者として活躍しており，そのようなネットワークを構築できていることは大きな強みであり，決して高校生として競技力が高くなくても，毎年継続して選手を育成してきていることは日本大学自転車部の特筆すべきことであった．

次に，自転車部の橋本選手より，自身の高校から大学生活の取り組みを振り返り，今後のトレーニングの課題が呈示された．それに加えて，印象深かったことは，大学の講義を優先的にトレーニングの組み立てを行っていることであった．そのために，1日の時間の使い方をよく理解しており，また，多くの人の理解を得ている印象を受けた．これは大学生のアスリートとして非常に重要な姿勢であると理解できる．橋本選手は，卒業後の就職先（和歌山県庁）でも慢心に陥ることなく，世界を目指して競技力向上を継続していける姿勢を日本大学自転車部で学んだように感じた．

写真２　シンポジスト各氏による発表

次に，重量挙部のコーチである竹俣壽郎先生より，JOC専任コーチングディレクターとして尽力された経験を日本大学でどのように生かしているかを中心にお話をいただいた．実際の糸数選手らの大会の映像を比較検討し，それを指導の現場に活かしていこうとしている様子は，オリンピックに出場する選手として糸数選手をはじめ日本大学重量挙部の選手に対する期待度の高さを伺うことができた．また，強化の方策に選手とコーチ（指導者）の関係に，スポーツ医科学委員会やJISSにおけるトータルサポートのシステムを組み入れると効果的であることを理解されており，総合的に選手を支援する体制づくりに尽力されていることも理解できた．

糸数選手は，既に日本のトップレベルにある選手として，自覚があると感じられた．糸数選手のトレーニング拠点は，味の素ナショナルトレーニングセンター（NTC）であり，常により緻密なフォームの改善に取り組んでいると聴いた．また，常に高重量に取り組むためのメンタル強化の重量性も指摘されており，身体能力を総動員して取り組まなければ成果が求められないのだと実感することができた．

シンポジウムの最後に，自転車競技と重量挙競技を研究対象としてきた池田先生からお話をいただいた．双方の競技についてバイオメカニクス的な視点から詳細な研究データを示していただきながら，現場が研究成果を活用できるためにはどのようにしていけば良いのかをお話をいただいた．自転車競技の研究データを呈示される中で，発揮された「最大パワーとタイムトライアル記録には相関関係が認められない」とする報告は興味深いものであった．

このように，本大会のシンポジウムは自転車競技と重量挙競技を取り上げたが，これらのアプローチの方法は他の競技に関わる選手やコーチ，研究者の方々に有用な知見とアイデアを与えるものになったと感じた．シンポジウムの終わりには活発に質疑応答もなさ

れた．本シンポジウムによって，日大アスリートが多くの関係する方々の支援を更に受け，東京2020オリンピック・パラリンピックで活躍するきっかけになったとすれば幸いである．

広瀬氏による特別講演は次ページにまとめた．

その後，百周年記念館エントランスホールにて一般発表が行われた．3つのブロックに分かれ，大学院生のみならず現役学生による発表も積極的に行われた．発表後の質疑応答も既定の時間を最大限使用し，活発な議論が展開された．

17時30分より文理学部3号館1階カフェテリア「秋桜」にて懇親会が行われた．約40名の参加者によって相互の親睦が深められた．最終的な参加者数は137名であった．

また，理事会及び総会も円滑に進行され，つつがなく終了したことを付け加えておく．

最後に今回の大会にご尽力いただいた先生方，体育学科研究事務室，快く実行委員会委員を引き受けてくださった大学院生の皆様，そしてご参加くださった皆様に重ねて御礼を申し上げる．

写真3　広瀬氏による特別講演

写真4　一般発表の様子